殘雪集

全

大月陸編

東京 文學同志會藏版

殘雲集
文學四老會編輯

大月隆編

殘雪集

全

東京 文學同志會藏版

題卷首

服部霞峰

須らく

筆を投じて

辰の春

古村半農

露可討兮露可討。貪狼如彼豈修好。
遼東山岳萬馬屯。妖氛欲掩韓八道。
王師可傲宋襄仁。履霜之戒憂元老。
我有兵氣衝斗牛。膺懲如風掃秋草。
奪彼艨艟碎彼堅、長驅直擣彼得堡。

殘雪集

其一

甘露寺竹翠

想ひ起せば春秋の、
過し十年の其の昔、
幾多有爲の兵士が、
血もて染めたる遼東を、
東洋平和の名の下に、
鷲の翼に奪はれし、
怨はいかで忘るべき、

よしや骸は朽ちる共、
血汐の跡は消ゆる共、
幽魂地下に生あらん、
起てや同胞四千萬。

敵は世界の敵なるぞ、
東洋平和の敵なるぞ、
伐てや諸人諸共に、
夙夜磨がきし我劒は、
平和を亂す彼露西亞を、
天に代つて斬らん爲、

我等が持てる劒は、
不義の輩を擊ん爲、
義を見て死する丈夫の、
心は香ほる日本魂、
いてや懲さん彼露西亞を。

彼の領土は廣く共、
などか恐るゝ事やある、
邪曲は正に勝ちがたく、
正義の旗の立つ處、
道義に富める我兵の、一

向ふ處に敵はなし、
いざや拂はん日本刀
いざや發かん村田銃、
今ぞ我等が積年の、
仇を報ずる秋なるぞ、
あな勇しの戰や。

其二

起てや同胞四千萬、
ヴォルガを越えて荒鷲の、
それにも似たり露西亞軍。
吾が東洋の平和をば、
馬蹄にかけて滿洲の、
秋風寒く爪を磨ぐ。
見よ荒鷲のもの悽く、

眼險しく羽根伸して、
虚空に雲を呼ばふなり。

臥薪嘗膽幾年ぞ、
血潮にかへし遼東も、
たゞ徒らに草青し。

時こそ來れいざ起たむ、
公憤義膽國民の、
腕は鳴りて肉躍る。

星斗は白きハルビンの、
高原霜は寒くとも、
好機は今ぞ千載の。

榮譽を擔ふ大丈夫が、
朔風いかに暴るゝとも、
禍根をなどか斷たざらむ。

ネヴァの河霧凍るとも、
血潮に渴く荒鷲の、
翼を斷たで已む可きか。

風雪萬里長驅して、
セントピータースブルグに、
凱歌をあげん日章旗。

其三

（一）

鷲のつばさ。
今斷たずんば。
東洋の平和。
夫何時か見ん。
彼れいかに。
羽根を伸とも。
太陽と伴しく。
日章の國旗は。

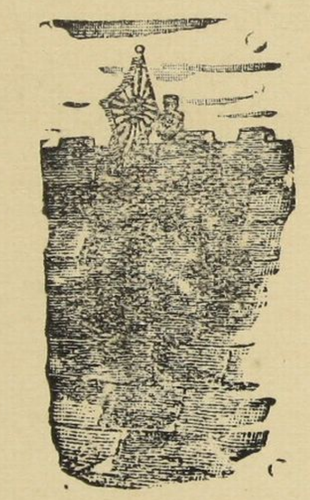
菟道春千代

その光りを。
地球の上に輝かせり。

（二）

鷲の爪は。
縱し鋭くも。
日本の名刀。
鞘を拂はゞ。
薙ぎたてゝ。
一羽も餘さず。
日本の武勇と。
國民の義膽は。

やがて知らむ。
汝が首足の分るゝ時。



其四

中山無墨碓

滿洲の野に雲立ちて、
　ウラルを越えし荒鷲は、
翼のばしてあれ狂ふ、
　此すさまじき勢に、
敵しかねたる黄龍を、
　助け起さん義俠の軍。

正義を無視し人道を、
　ゆめさらしらぬ露國の野蠻、

黑龍江を清人の、
　血しほに染めしも彼なるぞ、
猶太の民を屠りたる、
　暴戾も亦た彼なるぞ。

四夫の爲めにも報いてやらん、
　千古恨みの其仇を、
仁あり智あり勇氣ある、
　我等は日本男兒なり、
弱きを助け强きを挫く、
　我等は日本男兒なり。

仁義の旗よ日の御旗、
志那斗の風に飜へし、
世界の敵と戰はん、
公道の敵と戰はん、
日本刀の切れ味を、
味ひ見よや蠻奴の頭。

時しも秋の末つ方、
散るや紅葉のそれよりも、
はかなく散りしロシヤ軍、

勝ちに勝ちたる御軍は、
堂々として進み行く、
セントピータースボルグへ
セントピータースボルグに
城下の盟おもしろや、
いざや歌はん、聲高く、
正義の神よ萬々歳、
日本帝國萬々歳、
世界の民よ萬々歳。

其五

東洋平和を唱へつゝ
條約し言葉今何處
不禮不遜の振舞は
神も惡しと思すらん

愛翠

強きを挫き弱きをば
扶けて其名芳はしき
日本皇國の快男子
日頃鍛へし日本刀

研味見せむ時は今
國に盡さん時は今
起てよ同胞四千万
東洋平和の其爲に

其六

狸郷隱士

勳業を、
仰げば高き草薙の。
劍の光り今も猶。
輝きまさる皇帝の。
御稜威は遠き外國の。
其人々も仰ぐらむ。

時しも獨り亞魯西亞國。
天津御神の法則をば。

守りもやらで枉罪を。
犯して我れに敵せんと。
企むこゝろの愚さは。
神も惡しと思すらむ。

いざ諸人よもろともに。
世の爲め道の爲めなれば。
赤きこゝろを振り起し。
龍田の川の水清さ
皇帝國の誠實をば。
外國人に知らしめて。

鴨綠江を打ち渡り。
駒の蹄を揃へつゝ。
煙りの中に旭日影。
輝く御旗押し立てゝ。
寇なす敵を薙ぎ盡くし。
千代に八千代に光りをば。
いや輝かせ輝かせ

其七

藤川寒坊

驟雨はいまだ來らねど、
砲聲いまだひゞかねど、
空、曇色に墨ながし、
下界は暗につゝまれぬ。

光はなき乎、東洋の、
平和は土にじられぬ、
見よ、荒鷲の毒含む、
嘴、翼、擴ごりぬ。

やがては來なむ雨嵐、
あゝ凋落の神の手は、
木の葉のみやは、東洋の、
民が頭べもさらはなむ。

光はなきか、東洋の、
平和は土ににじられぬ。
見よ、荒鷲の毒含む、
嘴、翼、擴ごりぬ。

彼方うちなる日清の、

戰爭に勝を誇れるは、
世界を知らぬ日本なり、
吾身を知らぬ日本なり。

生氣はなきか、日本國、
四千餘万の同胞よ、
涙はなきか、血はなきか、
東亞は鷲の領たらむ。

立てよ國民一齊に、
國旗は何の旭かや、

鷲は禽なり、人は人、
只一撃ぞ、勇を鼓せ、

生氣はなき乎、日本國、
四千餘万の同胞よ、
涙はなき乎、血はなき乎、
東亞は鷲の領たらむ。

其八

澤村春霞

雷か猛雨か將た風か、
空は一面する墨を、
流すが如く闇濬と、
黒白も分かぬ雲の峯、
今や崩れて濁流の、
うちに入るかと疑ひの、
雰霧霽れぬ滿の野邊、
韓の海原空とぶ鳥、
野に伏す獸海にすむ、

其の鱗にいたるまで、
安さ心はなかりけり。

飽事しらぬ怪鳥は、
いで此の時と眼を睜り、
鋭爪を磨ぎ翼をのべ、
只一と攫と瞰下せば、
羽交をつぼめ尾を垂れて、
戰慄なきあな無慘、
群雞豕の肥肉は、
悍鷙の餌食とならんとす。

徳を盾とし義を戈に、
強を挫き弱さを、
扶けて其名芳はしさ、
我が神國の倭魂、
何ん條其の儘過す可さ、
東洋平和を攪亂する、
天地の敵ぞ討てや誅て、
我が遼東を横奪せし、
擧國の仇ぞ討てや誅て、
不禮不遜の國を討て、

誅つて肉をば食ふ可し。
討てや露西亞を誅てや露を。

忠勇義烈の我が軍が、
霹靂一聲沛然と、
降りくる彈丸しのつく雨、
貔貅百萬獅子奮進、
轟然として押寄する、
海嘯の如し水雷は、
龍宮城も震動せん、
電光閃々劍戟は、

鍊に磨へし日本刀、
向ふ所は砲壘も、
鋼鐵艦も忽ちに、
微塵に碎き粉碎と、
なり響きたる其の猛烈。

蹂躙にあれたる大鷲も、
羽翼を截れ肉寸斷られ、
我が軍門に降ちたるは、
天に代つて誅戮せし、
我が皇軍の功勳ぞ。

實に爽快のことなりけり。

既に雲霽れ風やみて、
天地は恰も拭ふが如く、
東天の空に赫々と、
輝き昇る朝日影、
さすが宇内の強國と、
皇國の日章御旗、
仰がぬ國ぞなかりける、
仰がぬ島ぞなかりける。

其九

宮崎象外

風雲急に押し寄せて
東洋の平和破れたり
起てよ同胞いざ共に
國に盡さん時は今
日頃鍛へし日本刀
斫れ味試めす時は今
建國以來輝やきし
國の光の鉾を提り

萬國無雙の我君の
稜威を楯に戴ける
四千餘萬の快男兒
進む前には敵あらじ

黃海の波高くとも
西比利亞の雪深くとも
燃立つ我儕の熱誠は
瞬く隙に蹴散さん

忠義の外に餘念なき

大和男子の前に立つ
コザック兵の輩は
集散常なき烏合の徒

我儕の敵にあらねども
東洋平和の犧牲に
平和の神に捧げなむ
進めや進めいざ進め
我天皇の稜威をば
宇内に輝すそれ迄は

其十　白田亞浪

見よや天父の御惠みを、
晩稻垂り穗の八束穗は、
千町の小田に靡き伏し、
唐黍燕菁粟蘿蔔、
畑万石に露重し、

聞けや惡魔の雄叫びを、
鷲の利爪に血は滴りて、
滿洲の雲亂れ飛び、

羆の舌に血渴きて、
鷄林の風霜寒し、

天父の心吾れ得たり、
降魔の任吾れにあり、
起て健兒　人道の征矢響さあり、
往け丈夫　正義の劒光りあり。

其十一

篠原松風

滿洲の地、
沃野茫々千里に亘り、
西興安嶺の麓より、東鴨綠江の岸に至る、
功業の天地は廣し、行け壯夫。

遼東の、
美粟露人の口に入り、
龍江の魚族彼等の腹を肥す、
懸軍千里屍をば、野邊に晒して勝ち得たる、

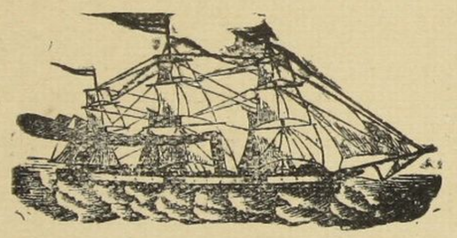
覺羅氏の故居今如何に、
一毛の草だに取らず、
すさまじやコサックの、
馬蹄のまゝに倒るなり、

撤兵の
要求何の甲斐あらむ、
西和蘭に平和の會議を開き、
東滿洲に掠奪を事とす、
ア、彼國何ぞ信あらむ。

伐てよ伐て、
彼如何に大國なりとも、畢竟是不義の小國、
彼東洋艦隊何かあらむ、
三十万噸の艨艟命をまてり
彼コサック又何爲るものぞ、
十二師團の強兵我に在り。

一舉して
海に陸に、彼無禮者を粉碎すれば、
滿韓悉く我に服して、東亞永久に、
平和の夢によはむ、

ア、勇ましや義俠の軍。



其十二

松天南

（一）

鷲が來た〳〵鷲が出た
向ふの森に今下りて
カア〳〵烏の塒をば
チウ〳〵雀の鳴く巣をば
情け容赦も荒鷲の
鋭き爪牙もて荒す爲

（二）

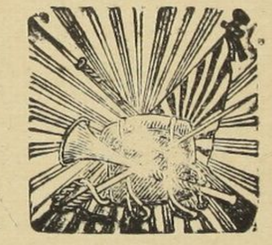
皆さん往きましよ筒とりて

筒には豆を打込めて
火蓋齊しく切りひらき
どん〳〵どん〳〵どん
悪い鷲めをうち落し
早く仇をば報いましよ

（三）

紙もて作る日の丸の
國旗を各手にうち振て
少年隊の眞ッ先きに
木太刀は貫く鷲の首
清らに歌ふ聲きけば

日本萬歲萬々歲



其十三

新泉締次

秋高く、わが馬肥えぬ、
いざさらば、怒濤を蹴つて、
風荒ぶ、哈爾賓の野に、
槊たてゝ、月に對せん。

西比利亞の、雪はふかくも、
浦鹽の、氷厚さも、
吾軀には、熱さ血充てり、
進むところ、皆解けなん。

膺てや血に、渇きし荒鷲、
腥き、嘴をも挫き、
瀆れたる、爪をも剝ぎて、
復び空翔け、得ざるまで。

忌はしき、白旗やきて、
右手に劍、左手に平和、
愍れむべき、友のために、
日の御旗を、露都に植ゑん。

其十四　犀川

東洋平和の攪亂者、
正義の敵なる露西亞をば、
天と人との、公憤を、
我等自ら、代表し、
伐ちて懲さむ、時は今。

傲慢不遜の、汝露西亞、
汝は嘗つて、同胞の、
血を流したる、遼東を、

平和の爲めと、欺きて、
我等の手より奪ひたり。

我等の公敵、汝露西亞
汝は近く、友邦の、
亂れに乘じ、出兵し、
傍若無人に、イーグルの、
旗をば今に、飜へす。

世界の賊なる、汝露西亞、
汝のザールは、去にし年、

平和會議を、主唱せし、
身にありながら、斯く爲すは
世界すべての、敵なるぞ。

アナ笑止なり、汝露西亞、
汝の理想は、夢なるよ、
東ローマの、滅ぶ時、
婿の緣りに、得し旗は、
汝が運命を、示すなる。

盲蛇に等しき、汝露西亞、

歴史は常に、くりかへす、
事を知らざる憐れさよ、
滅びしローマの、イーグルは、
汝が滅亡の、豫言者ぞ。

朝野愚昧の、汝露西亞、
内に和せざる、汝の國、
などよく外に、克つべきぞ、
寡政治の、汝が國は、
烏合の衆に、過ぎぬなり。

いざや進みて、露西亞伐て、
我等が國は、大日本、
我等が旗は、日の光、
我等が戴く、すめらぎは、
萬世一系に、在すぞ。

鷹てや伐て伐て、彼の露西亞、
浦潮の浪、何のその、
ウラルの颱、何のその、
建國以來、一度も、
侵されざりし、國民の、

向ふ處に、敵はなし、
西比利亞の寒、何のその、
モスクワの雪、何のその。

膺てや伐て伐て、露西亞をば、
臥薪嘗膽、十年の、
仇をば茲に、報ひ終へ、
世界の平和を、保全する、
我の使命の、貴とさよ。

進み膺て伐て、彼の露西亞、

四海を照らす、日の旗を、
ペーテルブルグの、城上に、
高く掲げん、時は今。

いざや膺て伐て、敵露西亞、
豐榮昇る、日の旗は、
我が理想をば、示すなり。
白刃の下、平和あり、
砲烟聲裡、平和あり。

其十五　大内白月

時既に、風、蓬萊の土砂揚げて、
神人、袖を捲したり。
見ずや、千樹の髪逆立ッて、
狂ふも露西亞の暴擧の怒り。
然るに、咄、今更、廟堂深く錦帳垂れて、
呶々の私語、そは遂に何ぞ。

あなや、あなや、年も限りの衰へに、
冬弱き日は傾いて、

蕭韓見す〳〵時雨れんとす。
時や今、平和の神は、逆鱗の、
裾、艶然と拂つたり。
不遜の鋭爪伸びてんげりな。
驚破と虚に乗る婢鷲跳んで、

何と、僭上なる、
今猶ほ、極東萬里、
赫と照せる、金鵄の靈光。
畏こと見ずや、あはれ、はれ、
佛、耶、今亡き二十世紀、

正しき人道を拓かむに、
躊躇ふものか、大和魂。
時なれや、仁義の鏡くもりたる、
擧世の汚點を拭ふべく。

思へ、建國三千載の、
歴史の生は唯此の二のみ。
然るに、咄、今にして、我威、
我生傷けんとすなる。
非道ぞ。露西亞、天刑免れじ、
いてや、汝、居直れ！神の命ずる所。

雷軍一躍、電霆一擊、
罪の鞭さの疾きを知れや。

其十六

矢崎万次郎

（一）

十歳のむかし同胞が
血に購ひし遼東や
義俠に獨立せしめたる
韓帝國は今や彼の
情け容赦も荒鷲が
顎の上の肉となし
我に侮辱を加へつゝ
あるを何とて忍ぶべき

星霜長く膽を嘗め
薪に臥すの思して
堪へ忍びしも斯る時
仇に報いん爲なるぞ

（二）

起てよ同胞四千万
東亞の平和攪き亂す
彼は道義の敵なるを
如何に翼は大なるも
如何に爪牙は鋭くも
我には天賦傳來の

義膽に添へて忠勇に
鍛へ上げたる刀劍あり
秋水三尺たちまちに
拔けば玉ちる露雫
凝りて氷の浦潮も
意氣堅艦を破碎せん

（三）

伐てよ丈夫遲疑せずに
進む旭日の旗風の
只一吹に草も木も
靡く滿洲西比利亞

黑龍江に血の波を
打して赤き誠心は
神も守らん神州の
日本男子が眞勇を
奮ふは天の使命なり
奮ひ進みて人道と
東洋平和の其爲に
惡魔の鷲を屠ふるべし

其十七

西脇八重子

一

鐵蹄に蹴たてよ西比利亞
砲火に鎮めよ日本海
浦鹽の天寒くとも
黄海の波荒くとも
東洋平和の重任を
負へる大和の健男兒
進めや〳〵諸共に
海陸ならびいざ進め

二

天の賜ひし好機なり
神の賜ひし好機なり
平和を知らぬ蠻國を
懲らすは今ぞ此時ぞ
宣戰布告と諸共に
進軍喇叭の聲俱に
博愛丸に乘り込みて
妾も宇品を艦出せむ

其十八　蘆陰

（一）

氷雨は絶ぬ西比利亞の
雪掻分けて出で來る
露西亞國なるスラヴ人
在らゆる秘術幾百の
思ひは長し數百年
百計茲に盡き果てゝ

（二）

西は土耳古に攻入て

血を流せしも幾そ度
其名も高きクリミヤの
戰爭に深痛打負ひて
南波斯やアフガニも
横ふ獅子の姿あり

（三）

秘術は盡きぬ程もなく
出でしは東滿洲の
野邊は肥えたり人もなく
大砲備ふ數百門
兵士屯す數萬人

其名も怪し開拓の

（四）

時こそ來たれいざ茲に
吾が東洋に人無きか
二千餘年の其間
打てきたえし日本刀
見す可き時は今なるぞ
いざ此腕の折れん迄

（五）

時こそ來れいざ茲に
條約は何處忘れめや

遼東の憾なほ消えず
海には軍艦十餘萬
陸には兵士數十萬
備へたりしも誰爲ぞ

（六）

東洋平和を唱へたる
爾が言葉今何處
我亦茲に東洋の
平和の爲めに爭はん
無暴無人の擧動は
正義の神ぞ之を看る

（七）

見よ崑崙の鐵溶けて
流れて海に落るとも
我唯如何で此儘に
爾が擧動を逃す可き
我に錬鐵の腕あり

スラヴニックも何のその

（八）

佐保世港の秋更けて
探海燈の影靑し
デッキに白く置霜に

明朝をも待ぬ兵士の
夢や何處に迷ふらん
夜は靜かなり海の上

（九）

我今茲に渠等をば
打て止ずば後の世の
災過奈何に量られん
我に正義の旗はあり
落ち來る潮高くとも
舞來る鷲は荒くとも

其十九

甲斐曉星

嗚呼、譎詭變幻是れ事とし、
姦奸暴戻是れ務めとし、
朝に四邊の隙を覗ひ、
夕に甘脆の佞辯を弄し、
乍ち軟に、乍ち硬に、
或る時は巨人の眠れるが如く、
或時は大河の迸るが如く、
乍ち急に、乍ち緩に、
時に惡魔の暴威を振ひ、

時に佛陀の慈悲を衒ふ、
萬邦の敵、平和の仇を討て!!

雲は迷ふ西比利亞の夕間ぐれ、
波は黑龍の激湍に咽むで、
蘆荻常に奏す、秋風の曲、
噫嗟、大鵬獨り威を弄して、
猥りに逞うす豺狼の慾、
見よ、西脊千四百七十八年、
かれ、欽察國の一隅に立つや、
遠く蒙古の愚民を驅つて、

窃かに呼ばふ、露國獨立、

かくて爾後百年を過去に埋めて、
かの惠兒碼虞智麽布來子が、
鞭を擧げて畫く斗大の雄圖に、
イスケルの首府夢と消えて、
鐵蹄忽ち蹂躙す西比利亞、
亞細亞是より長く憂ひ絶えで、
衰殘の半島夢圓ならず、
餘喘奄々たる大清もともに、
彼が無道の抑壓に屈して、
幾度か絞る恨みの袂、

一度ニコライヴスクに泣き、
二たび黑龍江北に忍び、
三たびウスリーの東岸を呑まれ、
四度ホルゴース河の西部を割かれ、
五度旅順の關門を閉され、
六度七度滿洲の野にはづかしめらる。
噫吁任俠みづから許す日本國、
何ぞ鄰邦の弱を援けて、
かの飽くなきの貪婪を討たざる、
ア、かの丁々たる伐木の音は、

我に戰ひを挑む罵聲にあらずや、
更に靑史のページを追ふて、
かの樺太のむかしを偲ばゞ、
誰か遺憾の涙なからん、
更に吾人の記憶を呼びて、
かの遼東の恨事を想はゞ、
何人か斷腸の恨みなからん。
されど忍べば彼益々驕り、
更に馬山浦に我を嗤ひ、
猶ほ龍巖浦に我を嘲る、

今にして彼を討たざらんか、
遂にわが神州を奈何せん!!
起て!! 起て!! 同胞正義の子等、
起つて醜虜の昏鈍を覺まし、
平和の仇を討て!!
噫嗟臥薪嘗膽茲に十年、
筐底おのづから聲あり三尺の劍。

其二十

桃園子

○浦汐も旅順もとりて日の丸の
御旗かゝげん時は來にけり

弘田光仲

はやり男のやそ氏人等陸に海に
打てひしげよ敵のあらきも

黨花

○まがつみの荒ぶる國の草薙て
露はおかせじ日の照すきはみ

今井柏軒

麗かに登る旭に道の邊の
芝生の露は消えにけるかな

告

○小雀とわれをあなどる荒鷲を
たゞ一とうちに伐や諸人
かれをしも討たで止むべきものとせば
伐べき仇は世になかるべし
刈りつくせ醜の醜草かりつくせ
からで殘すな後の憂ひを

○狩すべき秋は來りぬ駒なべて

北の荒野に大鷲追はむ

黒龍子

○荒鷲といへば恐ろし武夫の
矢にはぐ鳥と見れば悲しも

無名氏

○今にして露西亞征ざれば浦安の
國もなか〳〵浦安からじ

I Y子

○なんのその朝日の御旗たて〻見む
烏拉の山はよし高くとも

小萩

○雲とびて風いとはやしあすあさて
雨とやならん滿洲のそら

愛子

○みいくさのそなへはかねてと〻のひぬ
鷲の羽風の何おそろしや

西のうみにみふねつとひぬいさましき
つ〻のひゞきをはやきかまほし

いたづらに時をすこしてさかにくき
しこの荒鷲うちなもらしそ

山本千載

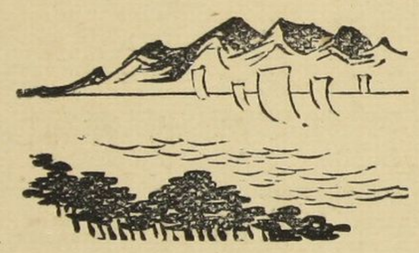
○起てよいざ大和男兒よ起たずあらば

亞細亞の空は闇になりゆかむ
長白の山枯れつきて鴨綠の
水の色あかく流るとぞきく
帝陵もあばくになにかためらはむ
かれら鬼の子人の道知らんや
今にして伐たで止まんか陸に海に
將卒いたづらに老いんとすらむ
よしさらば吾に筆あり史の上に
「露人無道」と書きてとゞめん

安藤鐵門

○

百年の後に悔とも甲斐はなけん



いま此時を徒に過ごさば

其二十一

○露城枕に討死したい支那でのこしたこの命　森安笑樂

○辛い別を仕樣と儘よ露國懲にや氣が濟まぬ　香車坊

○積る浦鹽晴らした末は露西亞の都で新世帶　小男山人

○上見ぬ鷲にも目が眩む筈光り輝やく日章旗　華月庵

○　河野利重

平和好むは日本の主義よ露國討のも其が爲　みすじ家

○鷲や黑鳩たゞ一と攫み大和こゝろの八咫烏　櫻亭芋吉

○上見ぬ鷲をば只一と討と覘ひ定めた村田銃　一色安藏

○傲慢不遜の露國の奴を打てこらさん村田銃　藤太郎

○露國の革だと聞や此靴も足で蹴飛し踏躪る　歌澤子

○主を勸めて出陣させて妾や露西亞を呪ふ神

夕暮に、ながめ見渡す浦鹽の、沖に集る軍艦、烏拉の山が見ゆるぞへ、アレ旗が立つ日本の、國旗ぢやないかいな。

○　一色安藏

其二十二

血潮と代へし遼東に
彷徨ふ魂の叫ぶ聞け
黄沙白草風吹けば
夜は戰聲のなからめや
義戰の跡も早や已に
見よ韓山の空の色
日は長白に傾むきて
李氏の社稷や今奈何

聞コサックの矢叫に
王道の頽絶えむとす
文字同じき經典の
教は古き孔聖が
仁の名國と氓びなば
四億の民はまた生じ
かの黎民を憐れまば
咄人道の賊を斬れ

黑龍一たび血に染て
五千の生靈鬼なりき

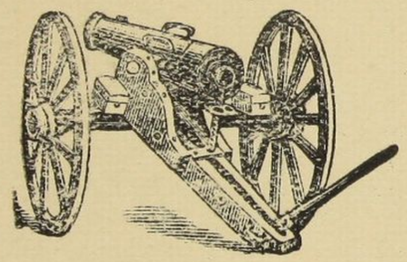
虐殺いまだ飽ざるに
又キシネフに累屍有り
ザーの軍と稱へてし
スラヴの兵は賊なりき
神人ともに憤ほる
史上の罪は消べしや

萬國平和を唱へたる
爾の言葉今いづこ
條約を宣べし嘴に
滿州の粟與へんや

東、扶桑に國を成す
わが民族の發程は
魯人を斬て犧牲に
平和の神を祭るべし

平和の光うらゝかに
影東海に輝けば
われ商神の杖とりて
萬世富强の基おかむ
鐵火はためく戰場は
家國の運命君に依つ

征け忠勇の我友よ
征け軍國の烈丈夫



其二十三

◎忍ぶ戀路の替唄

露の命はさて敢果なさよ昇る朝日の御光にあふと其儘消る身と知らでは飛こるいちらしさ

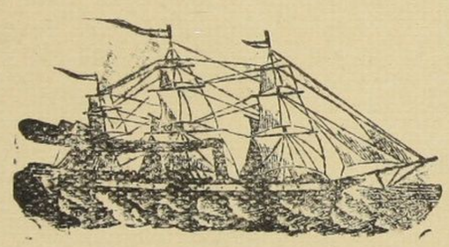
「日の本の光まばゆくさしそめてもろくも消えしあだし野の露」

「日に露は果敢なきものゝたとへかな」

（豆陽枕月生）

◎敵の後悔

廣言を吐さて今更悔ゆるなり



旅順の口は禍の門

其二十四　わが魂

あゝわが魂はくだけたり。
春の霞の中にして
人は生命の香に醉へど、
幽鳥歌もなき如く、
もだえは深き闇にして、
あゝわが魂はくだけたり。
されども盡きぬわが靈想、
かくて空しく消えなんや、
汚塵を拔きて天遠く、

のぼりて曉の星と澄みなむ。

其二十五　浪ちる里

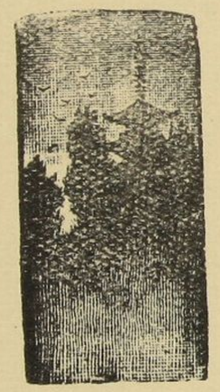
浪ちる里の曉に、
君は男の子と生れけり、
見ずや無限の大空に、
惠の星のえまへるを。
眞白の胸に手をあてゝ、
開きそめにしまなざしに、
やさしの君よそもいかに、
人の此世をうつしたる。
白帆の影に夢のせて、

のぞみの海を渉るとき、
船路は君よつらくとも、
神の光のなからめや。
浪ちる里の曉に、
君は男の子と生れけり、
されば冴やけき明星は、
とはにゆくへを照すらむ。

其二十六　白梅紅梅

春の初子と生れてし、
白きは白き白梅の、
紅きは紅き紅梅の、
同じ自然にほゝゑめど。
氷を出でゝ新なる、
生命の水に根ざしゝか、
塵をも据ゑぬ白梅の、
花の色香のなど清き。
榮華の風の吹くや今、

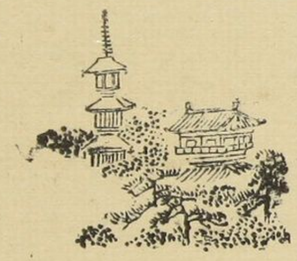
春の心に咲きにしが、
もゆるばかりの紅梅の、
などその色の狂はしき。



其二十七　薔薇の露

花の姿を戀とせば、
露こそ戀の生命なれ。
はかなき露も美くしさ、
花に宿りて結ぶなり。
燃ゆるが如き紅ゐに、
咲きたる薔薇の其花を、
やさしとわれは見たるなり。
忘がけるごとくはなやかに、
宿りし露のその玉を、

あはれと君はおぼさずや。



其二十八　進軍の歌

日輪照らす其時は
露さへ消えて根を絶やす
開らく蕾や花もなし
憐や露國の末路かな
戰は我がまゝ得手勝手
我さへ勝てば夫でよし
國へ盡すは今ぞかし
進や兵士猶豫なく
大いに進んで戰へば

勝に極つた我勇士
利益は御國へ殘し置
露助や降參早くしろ
陸にはかばねを晒すとも
海には魚腹を滿すとも
軍人ビクトモするのじやない
滿洲原野を踏附ろ
萬の神々まもるなり
萬八千の後までも
歳々稱えて譽られよ
陸軍海軍萬々歳

其二十九

●露國軍歌　極東大守アレキシーフの依頼に應じて作れりとの大和郡山閨狸睡なる人左の如き軍歌を發表せり

露國進軍歌

其一

進めや進めいざ進め
敵に會ふまで進むべし
若や敵に出會ひなば
何は兎もあれ逃るべし

進むは國の爲ならず
猶更己れのためならじ
心得違ひのないやうに
逃るつもりで進むべし

其二

進めや進めいざ進め
死なぬ覺悟で進むべし
わづかの給料貰ふ爲
死では引合ふ物でなし
進は我等の義務なれど
逃るは我等の權利なり

命の二つなきものは
死なぬ覺悟で進むべし

其　三

進めや進めいざ進め
亂暴する氣で進むべし
道には婦女を辱め
他の寶を奪ひ取れ
こんな機會に暴れずば
復と暴れる機會はなし
軍規もへチマも有物か
無暴に暴れて進むべし

其　四

進めや進めいざ進め
後方を向いて進むべし
強い敵兵前にあり
怖い大砲横にあり
刀はピカ〳〵輝きて
彈丸はピユー〳〵飛んで來る
腰を拔かさぬ其内に
後方を向いて進むべし

其　五

進めや進めいざ進め

敵の居ぬ地に進むべし
成だけ道を迂回して
方角違ひに進むべし
縱令我等は弱くとも
敵に遇ねば負はせぬ
スラヴ頭を振立てゝ
威張り反つて進むべし

其三十　義憤

『天の命なり不義はなし。
彼得以來强き邦、
小國の呪咀何せむ』と、
猿よ假面に理を衒ひ、
ザールが亂す世の平和、
神の啓示もあるべきに、
僞悔ひて省みて、
天に逆らひ義に背き、
我と早むる凶運の、

滅亡の歌を今ぞ聞け。

其三十一　進軍歌

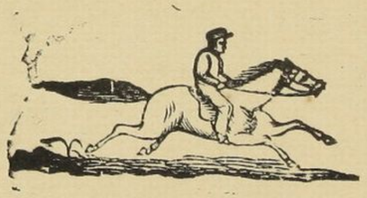
斬れや盡せや赤蝦夷、
霹靂一聲西比利亞、
山野を震ひ撼かして、
凱歌あげよ神武軍。
起てよ奮へよ快丈夫、
劍光一閃滿洲、
日本海の浪蹴立て、
凱歌あげよ神武軍。
世界の爲めに永遠の、

平和を得よと神武軍。

其三十二　我が夫

いざ行き給へ我が夫よ、
重き枕の母上と、
君が片身の幼兒を、
護る妾のあるからは、
夢にも後方な見かへりそ。
門出を送る村人が、
高く唱ふる『萬歳』や、
その音によそへ後をば、
顧みますな我が夫よ、

御國の耻ぞ家の耻、
父の耻とて懷裡の、
稚子さへもかく微笑めば。



其三十三　何の憤怒か

東天萬重の雲黑く、
平和の光あゝいづこ、
春の微風來つれども、
北山の雪降り止まず、
強く冷く凄じく、
吹雪は空に荒れ狂ふ。
何の憤怒か。
春の新潮寄すれども、
北海の水暖まらで、

白く嚴しく怖ろしく、
氷は洋を張り鎖す、
何の憤怒。

其三十四

●露國軍歌

大和郡山の閨狸睡と云へる人の露國進軍歌は前號に掲げしが尚同人より更に退軍歌を得たり

露國退軍歌

逃よ逃げ〳〵皆逃げよ
スタコラヨイヤサと逃出よ
日本は素敵に強い國
此方はベラボに弱い國
強いと弱いが戰へば

どうせ弱いが負なるぞ
命取られちや堪らない
命あつての物種ぞ
恥外聞もあるものか
早く負べし逃げるべし

其二

逃よ逃げ〳〵皆逃げよ
スタコラヨイヤサと逃出よ
たとひ弱いと言れよが
腰抜兵士と笑はれよが
ヤポンスキには叶ない

ウカ〳〵して居ちや首が無
こんな馬鹿げた事はなし
こんな詰らぬ事はなし
どこの何兵衛に義理やある
命のあるうち逃げるべし

其五

逃よ逃げ〳〵皆逃げよ
スタコラヨイヤサと逃出よ
我はロスキー先方は
天下晴れての御人様
殊に鐵砲も上手なり

殊に刀も切れるなり
とても我等の痩せ腕で
ヤポンに勝やう筈はなし
苦しい思ひをせぬ中に
逸足はやく逃げるべし

殘雪集をはり

明治三十八年三月八日印刷
明治三十八年三月十一日發行

定價金拾貳錢

著作權所有

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十番地　大月隆
印刷者　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目　青木弘
印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目　株式會社秀英舍第一工場

發兌元　東京市神田區錦町一丁目十番地　文學同志會
（電話本局千〇九十三番）
大阪市江戸堀上通一丁目一一九番邸　文學同志會大阪支部

文學同志會出版圖書目錄

美妙　定價二十錢　郵稅四錢

人生の氣力　定價三十錢　郵稅四錢

人生の初旅　定價二十錢　郵稅六錢

人生の老旅　定價二十錢　郵稅四錢

人生の悔悟　定價二十錢　郵稅四錢

人生の片影　定價十錢　郵稅二錢

人生の目的　定價廿五錢　郵稅四錢

人生經濟學　定價二十錢　郵稅四錢

人物の裏面　定價二十錢　郵稅四錢

吾人の生活　定價廿五錢　郵稅四錢

山高水長　定價二十錢　郵稅四錢

風月萬象　定價廿五錢　郵稅六錢

斷崖絶壁　定價二十錢　郵稅四錢

枕頭の山水　定價二十錢　郵稅四錢

松風吟月　定價二十錢　郵稅四錢

郊外散策　定價廿五錢　郵稅四錢

悲哀の快觀　定價廿錢　郵稅四錢

萬情萬眉　定價十六錢　郵稅二錢

近世社會主義評論　定價一圓　郵稅十六錢
社會研究新論　定價一圓十錢　郵稅十六錢
最近國家社會主義　定價六十錢　郵稅六錢
東洋社會黨　定價五十錢　郵稅六錢
急務檄言　定價三十錢　郵稅四錢
斬奸狀　定價廿五錢　郵稅四錢
精神と力量　定價三十錢　郵稅四錢
虛心談　定價廿五錢　郵稅四錢
活學談　定價二十錢　郵稅四錢
活精神　定價三十錢　郵稅四錢

活禪錄　定價五十錢　郵稅六錢
禪學斷片　定價廿五錢　郵稅四錢
聖僧道元　定價二十錢　郵稅四錢
日本佛教拾二傑傳論　定價三十錢　郵稅四錢
馬琴妙文集　定價二十錢　郵稅四錢
滑稽妙文集　定價三十錢　郵稅六錢
戲曲妙文集　定價二十錢　郵稅四錢
呑氣文集　定價廿五錢　郵稅六錢
高等艶麗文集　定價廿五錢　郵稅四錢
立身の事蹟　定價二十錢　郵稅四錢

研學の順序　定價二十錢　郵稅四錢
青年の將來　定價廿五錢　郵稅四錢
作文指南　定價廿五錢　郵稅四錢
山水記事論說文　定價廿錢　郵稅六錢
社交記事論說文　定價廿錢　郵稅六錢
高等記事論說文　定價廿錢　郵稅六錢
偉人の膽力　定價廿五錢　郵稅四錢
偉人の生長時代　定價廿二錢　郵稅四錢
頓才の詩人　定價十錢　郵稅二錢
閨秀の佳人　定價二十錢　郵稅四錢

婦人實務錄　定價二十錢　郵稅四錢
女子講本　定價三十錢　郵稅六錢
活戀　定價三十錢　郵稅六錢
戀と死　定價二十錢　郵稅四錢
墳墓の地　定價廿五錢　郵稅六錢
失策の半生涯　定價三十錢　郵稅四錢
成功秘訣　到若　定價廿五錢　郵稅四錢
處世四十八手　昨非錄　定價十錢　郵稅二錢
天籟萬文　定價二十錢　郵稅四錢
小文學　定價廿五錢　郵稅四錢

小氣焰　定價廿錢　郵稅四錢
小哲學　定價廿五錢　郵稅四錢
珍本 鳴長明海道記　定價十五錢　郵稅二錢
國史資料 回國雜記　定價二十錢　郵稅四錢
理想の大臣　定價廿五錢　郵稅四錢
禪學の奧義　定價五十錢　郵稅六錢
哲學要領　定價五十錢　郵稅六錢
加賀の千代　定價二十錢　郵稅四錢
成效者の苦學　定價二十錢　郵稅四錢
軍隊の側面　定價二十錢　郵稅四錢

理想の政黨　定價廿錢　郵稅四錢
高等家庭讀本　定價廿錢　郵稅六錢
戀愛の精神　定價廿錢　郵稅六錢
人情の後見　定價廿錢　郵稅四錢
無能の天下　定價廿五錢　郵稅六錢
社會學講義　定價五十錢　郵稅六錢
社會學と哲學　定價六十錢　郵稅十錢
吾家の憲法　定價廿五錢　郵稅四錢
人生の審美　定價廿五錢　郵稅四錢
文學の審美　定價廿五錢　郵稅四錢

自然界の審美　定價廿五錢　郵稅四錢
婦人の情力　定價三十錢　郵稅六錢
戀愛の文豪　定價二十錢　郵稅六錢
弱者の臨終　定價三十錢　郵稅四錢
英雄の片影　定價二十錢　郵稅四錢
心識活談　定價廿五錢　郵稅四錢
詩經新體詩選　定價十錢　郵稅二錢
改選新體詩　定價十錢　郵稅二錢
詩の神　定價二十錢　郵稅四錢
學生の苦心　定價二十錢　郵稅四錢

老子講義新釋　定價壹圓　郵稅二錢
心學養性篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學道體篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學人間篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學道義篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學迷悟篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學性理篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學明德篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學靈性篇　定價廿錢　郵稅四錢
俳流の女神　定價二十錢　郵稅四錢

緒言　定價廿錢　郵稅四錢

高等秀才文集　定價卅二錢　郵稅六錢

奇僧の片影　定價廿五錢　郵稅四錢

高等才媛文集　定價三十錢　郵稅六錢

風彩と審美學　定價三十錢　郵稅六錢

審美學要義　定價三十錢　郵稅六錢

高等美文斷片　定價廿錢　郵稅四錢

女子美文斷片　定價廿五錢　郵稅四錢

心琴　定價二十錢　郵稅四錢

馬琴旅行文集　定價卅錢　郵稅六錢

秀才記事論說文　定價卅錢　郵稅六錢

中等作文組立法　定價廿五錢　郵稅四錢

美文組立法　定價廿五錢　郵稅四錢

近松妙文集　定價廿五錢　郵稅四錢

西鶴妙文集　定價廿五錢　郵稅四錢　發賣禁止

爲永妙文集　定價廿五錢　郵稅四錢

芭蕉妙文集　定價廿五錢　郵稅四錢

立身冒險談　定價廿五錢　郵稅四錢

冒險成功談　定價廿五錢　郵稅四錢

名流の家憲　定價廿五錢　郵稅四錢

社會學問答　定價三十錢　郵稅四錢

社會學と事業　定價七十五錢　郵稅十錢

超然教育學　定價二十錢　郵稅四錢

軍人の膽力　定價二十錢　郵稅四錢

軍人座右銘　定價二十錢　郵稅四錢

處世の歌　定價三錢五厘　郵稅二錢

小學高等科字引　近刊

小學尋常科字引　近刊

征露の歌　定價一二錢　郵稅二錢

post card album

86
1041